

白樺派の中心作家として活躍 明治・大正を代表する歌人



明治4(1871)年、廃藩置県を迎えた時の最後の藩主は木下利恭^{としもと}。跡継のいない利恭の没後、木下家を継いだのが甥の利玄でした。旧各藩の当主は、当時東京に住んでおり、利玄も上京。宮中の新年会などに着用したであろう利玄の大礼服が今も残っています。

東京での利玄は佐佐木信綱に師事するなど短歌に親しみ、東京大学在学中には旧知の武者小路実篤らと雑誌『白樺』を創刊。白樺派の歌人として世に知られるようになります。

精力的に創作活動を続けた利玄ですが、志半ば、40歳の若さで病に倒れてしまいます。

木下利玄

(1886年～1925年)

もっと知ろう！ 木下利玄

1

足守に残る足跡



足守には、利玄の生家跡(県指定史跡)や「利玄みち」と呼ばれる散策路があります。生家跡の近くには、歌碑の建つ大名庭園・近水園(おみずえん)があります。

2

白樺派の中心作家として活躍



左:『銀』大正3(1914)年5月 洛陽堂 右:『紅玉』大正8(1919)年7月 玄文社/廣布市武者小路実篤記念館所蔵



『白樺』創刊号の表紙 明治43(1910)年4月 洛陽堂/廣布市武者小路実篤記念館所蔵

志賀直哉、武者小路実篤、有島武郎らと美術文芸雑誌『白樺』を創刊した木下利玄。創刊を共にした彼らは誌名から『白樺派』と呼ばれ、一時代を築いていきました。

3

明治・大正の文学史に一石を投じた歌人



木下利玄/日本近代文学館提供

を用いた作風で世に知られます。それらは『利玄調』と呼ばれ、歌壇に新風を巻き起こしたのでした。

足守藩2代・木下勝後は、後半生を歌人として隠棲。長嘯子と号しました。それから約四百年後、末裔の利玄が短歌を志し、独特な四調と上手に口語